

通巻五〇〇号の節目に

吉田 憲司

プロフィール
1955年京都府生まれ。国立民族学博物館長。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。大阪大学助手、国立民族学博物館教授などを経て、2017年4月より現職。おもな著書に『文化の「発見」』（岩波書店）、「サントリー学芸賞」と委員、『仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還』（臨川書店）などがある。

『月刊みんぱく』が、通巻五〇〇号を迎える。一九七七年、みんぱくの開館の前月に第一号が刊行されて、四二年と七か月。この間、文字通り「毎月、みんぱくの動きとみんぱくにかかわる人びとの知見を社会に発信し続けてきたことになる。『月刊みんぱく』創刊にあたって、初代館長の梅樫忠夫は、「この施設を市民に身ぢかなものとしてしたしんでもらうために、できるかぎりの活発な広報努力をはらう」ことをめざして、この月刊誌を刊行するのだとしたためている。

私自身は、一九八七年六月、大阪大学文学部の助手からみんぱくの助手に転任し、まもなく編集委員会のメンバーとなった。一九九〇年の三月から五月にかけて開催した、みんぱくの第一回の企画展「赤道アフリカの仮面——秘められた森の精霊たち」を担当し、この展示をめぐる記事を『月刊みんぱく』にいくつも寄稿した。その展示を終えたのち、一九九〇年の夏からの一年間、私はロンドンの大英博物館民族誌部門（当時は、人類博物館という独立した建物もついていた）に客員研究員として赴くことになり、編集委員としての活動は休止状態となった。帰国後、一九九二年の一月号から六月号まで、大英博物館での経験について連載をした。編集委員会を離れることになった会合で、編集委員としては必ず

しも大きな貢献はできなかったが、執筆のほうでは、それなりのお役目を果たせたのではないかと語ったことを記憶している。

当時、私の文章も含めて、『月刊みんぱく』に掲載されたエッセイが、『週刊文春』誌上の上前淳一郎氏の連載コラム「読むクスリ」で取り上げられ、同タイトルの単行本にまとめられて刊行されることがしばしばみられた。この月刊誌が、その幅広い論調から、広くジャーナリズムや経済界にまで継続的な読者を獲得してきていることがうかがわれた。

類似の広報誌が各所から発行されるようになった現在でも、『月刊みんぱく』は広い層からの支持を得確かな存在感を示しているように思う。

目を現在の世界に転じると、地域や文化を超えた接触と交流が常態化する一方で、排他的で偏狭なナショナリズムが頭をもたげようとする動きも垣間見える。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えて、共に生きる世界の構築をめざすという文化人類学の知が、あらゆる分野で求められている。みんぱくと、みんぱくの築き上げる知を、分野を超えて伝える「広報誌」として、『月刊みんぱく』の果たすべき役割はますます大きくなっている。この月刊誌が、より多くの方々の目に触れ、多方面で活用していただけたことを願っている。

月刊
みんぱく

5月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
通巻五〇〇号の節目に
吉田 憲司</p> <p>2 特集 月刊みんぱく 500号のあゆみ</p> <p>8 復活! 読者のページ Q&A O</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
みんぱくの顔『月刊みんぱく』</p> <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
Dr. みんぱく
久保 正敏</p> | <p>16 新世紀ミュージアム
ユニバーサル・ミュージアム
広瀬 浩二郎</p> <p>18 シネ倶楽部 M
劇映画のなかの万博
——「家族」
飯田 卓</p> <p>20 ながなんちゃ
ながないんちゃ
吉岡 乾</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|